

インドネシアにおける子どもの社会化と民話の役割

——子ども向け『民話集』の分析を手がかりに

百瀬侑子

はじめに

インドネシアには、かつて豊かな「声の文化」(ウォルター・オング『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991年)が息づいていた。民話(cerita rakyat)をはじめとする口頭伝承は共同体を維持・結束するうえで、重要な社会的機能を有していたのである。だが近代化による伝承社会の内部変化、伝達媒体の革新により、口頭伝承(声の文化)としての民話は本来の力を失ってしまった。他方、印刷され「文字の文化」となった民話は新たな力を獲得した。インドネシアにおける読み物としての民話の成立は、オランダ植民地期の19世紀後半に遡る。植民地政庁は「反体制的な要素を持つ出版物の影響から住民を遠ざけるため」(Balai Pustaka, *Gambaran Umum 80 tahun Balai Pustaka*, 1997, p.5)に官製出版社を設立し、古典文学や民話などを多数刊行した。子どものしつけや社会化(socialization)を促すための教訓的な子ども向け民話本も出版された。

独立後、民話の採集・記録は国家の重要な文化事業となり、政治的な思惑のなかで利用されてきた(百瀬侑子「インドネシア近現代における政治ツールとしての民話」『アジア経済』2008年6月)。スハルト政権下では大規模な民話採集プロジェクトが実施され、地方語(民族集団や地域の言語)からインドネシア語(共通語)へと翻訳された膨大な「国民民話集」が刊行された(百瀬侑子「インドネシアにおける国民文化形成と民話」『アジア太平洋レビュー』2006)。また民話は小学校の教科書にも掲載され、国民教育の教材として使われた。

民間においては、主に子ども向けの読み物として出版された。その一部は政府によって学

校図書館用買い取られ、児童に提供された(*Prisma*, 1987年5月)。「漫画などではない質の高い読み物を提供するため」(1979年配布図書のとがき)の措置である。政府予算の投入によって、1979年以降子ども向け図書は出版社にとって採算のとれる事業となる(前掲*Prisma*)。80年代になると、開発政策による経済発展や教育普及(1984年に小学校6年が義務教育となる。1988年の小学校就学率は89.9%)の効果から、児童書や雑誌の市場は拡大する。ただし市場を席卷したのは外国の漫画や翻訳児童書である。現在も国産の児童書は外国製に押され気味である。

だが危機感も持たれている。たとえば日本製漫画の氾濫について「子どもたちがあまりにもグローバルな世界に触れれば、民族文化の根幹を知らないままになる」(*Tempo*, 1999年7月25日)という危惧が持たれ、良質な国産児童書や民話本を求める声も出ている。最近では学習意欲と読書習慣の相関性が指摘されるなか、幼児期の「読み聞かせ」や「語り」の重要性が注目され、その教材にも民話本が利用されている(*Kompas*, 2006年2月24日)。また国民文化政策の陰で軽視されてきた地方の言語や文化を学ぶための教材として、地方語による民話本が各地で刊行されている(西カリマンタン、パプアなど)。民話は地方の子どもたちの自文化への認識と自信を深めるための媒体として再評価されているのである。

子ども向け民話本の歴史を振り返ると、国家や社会などおとなの思惑によって、子どもの社会化のための格好な媒体として利用されるという一連の流れを確認できる。裏返せば、民話本はその時代のおとな側のニーズや価値観を映し出す鏡とも言える。本稿では、現在も子どもの教育や社会化のために民話や民話本が利用されているという事象に注目し、時代背景としての

国家教育政策、社会動向、家族関係などを参照しながら、現代インドネシアのおとなたちは子どもの社会化のために、民話のなかにどのような価値要素を発見し、子どもたちに伝達しようとしているのかを考察する。価値要素の抽出にあたっては、この十数年間広く読まれている子ども向け民話集を用いる。全体構成は次のとおりである。「1」では、子どもの社会化に関する国家・社会・家族の価値観とその変化を観察し、インドネシアの子どもの社会化に関する現状を明らかにする。「2」では、最近の民話集の「巻頭辞」と「解説」を分析することによって、民話を通して子どもにどのような価値要素を伝達しようとしているのか、なぜ民話という媒体が有効だと考えるのか、おとなの認識を探る。おわりに、「1」「2」の考察を踏まえ、「巻頭辞」「解説」に示された価値認識と社会背景の関連性を検討する。加えて、社会や教育界の最新動向に言及し、今後のインドネシアにおける子どもの社会化と民話の新たな役割について展望を示す。

1. 子どもの社会化をめぐる諸状況

ひとの社会化とは「自分を取り巻く社会や文化の価値観を自分のものとしていくこと」(荻野美佐子「社会的発達の文化的視点」『子どもの社会的発達』東京大学出版会1997年、237ページ)であるという。社会化の第一歩は親子関係から始まり、近隣、学校へと徐々に世界を広げていく。自己形成とアイデンティティ形成の過程である。また社会や国家の再生産を支える「行為者(担い手)」へと創られる過程でもあり、家族・共同体・国家から様々な「呼びかけ(語り)」を受けながら成長する(今村仁司「文化の生産と表象の鏡」『文化の生産』ドメス出版)。まず家庭では「生まれたときから父母の語りを通して、社会の掟を知らぬ間に吸収していく」。共同体では「慣習、伝統、礼儀などが教育効果を発揮する」。国家からは「明快な政策目的をもった呼びかけがある」(前掲今村:286-287ページ)。周辺空間を広げつつ、おとなの「語り」の影響を受けて子どもは社会化されていく。

では、現代インドネシアにおいて、子どもはどのような「語り」を受けて成長するのか。上

述の三空間を念頭に置いて、以下の考察を行う。①国家は子どもをどのような国民に創ろうとしているのか、国民教育政策から政府の「語り」を探る。②スハルト政権下の開発政策による近代化は、社会に構造的な変化をもたらし、家族のあり方や子どもの社会化に影響を与えた。その変化を捉え、子どもの社会化をめぐるおとなの認識状況を探る。

1.1 国民教育政策に見る教育理念・社会化観

「国民国家は、『国家』という観念と無縁なところで生きてきた人びとに、社会的アイデンティティの源泉を国に求める心性を形成した」(箕浦康子「心理・教育人類学の新しい地平」『文化人類学のフロンティア』ミネルヴァ書房2003年、265ページ)というが、多民族国家インドネシアにとって、国民統合は未だ完結しえない政治課題である。教育は国家開発政策の主要な柱であり、国民統合のための重要な役割を担う。スハルト政権期にはそのための諸政策が強権的に実行された。現政権においても分離独立運動・宗教対立など国家統合を揺るがす事態を回避するための政策が重視されており、教育政策は依然として国民統合政策の柱である。中期教育開発計画(2005-2009年度)の目標は「学習者の知性面に限らず、人格、モラル、社会的・肉体的側面をも開発することを目指す。完全なるインドネシア人を創ること」である。まさに政治と教育は直結しているということがわかる。

国民教育の基本方針は「国民教育制度法」に規定されている。現行の「国民教育制度法(2003年法律第20号)」はスハルト体制崩壊後の「民主化」「地方分権化」という政治改革に対応するために、2003年7月に制定された新法である。スハルト政権下の「国民教育制度法(1989年法律第2号)」と大きく異なる点は、教育の地方分権化、各学校の自由裁量権の拡大、知識偏重から「社会的コンピテンシー重視のカリキュラム」(後述)への転換である。

では国民教育の具体的目的は何か、条文から確認しよう。旧法には「教育の目的は民族の生活を発展させ、インドネシア人を完全に開花させることである。すなわち、神への信仰を持ち、神の教えに従い、高貴なるふるまいをなし、知識と技術を持ち、心身ともに健康であ

り、安定・自立し、社会的・国民的責任感を持つ人間である」(旧法4条)とある。新法には「神への信仰を持ち、神の教えに従い、高貴なる道徳(エチケット・行儀・モラルなど)を持ち、健康で、知識があり、有能で、創造的で、自立し、民主的で責任感を持った国民になるために、学習者の潜在能力を開発することを目的とする」(新法3条)とある。

いずれにも国民のあるべき理想像が掲げられ、知識や技術のみならず精神性やモラルを含む全人的な教育が目指されている。両法に共通する要素は「神への信仰」(注:国民教育に不可欠な要素として信仰を持つことが規定されており、「宗教教育」は小学校から大学まで必修科目である)、「高貴なるふるまい(道徳)」、「知識」、「健康」、「自立」、「責任感」である。新法には「創造的」「民主的」という要素が加えられ、スハルト後の新国民像が示されている。2003年教育制度法に沿って2004年に新カリキュラムが策定され、新時代を意識した新シラバスが編成された(後述)。新教育政策が社会に根づくのは先になるが、国家の教育観・社会化観は確実に変化していることが見てとれるのである。

1.2 子どもを取り巻く社会と家族の変化

スハルト政権下の国家開発政策(1969年開始)はインドネシアを近代化へ導くと同時に、社会に構造的な変化をもたらした。まず農村社会の変化である。新農業技術の導入、インフラ整備、識字教育(インドネシア語の普及)や家族計画政策など政府主導の農村開発は、農村を近代化し、都市との社会的・文化的差異を狭めた(セロ・スマルジャン他『インドネシア農村社会の変容』明石書店2000年、347ページ)。農村に物・情報・技術が流入し、古い慣習や伝統は影響力を弱め、仕事を求めて都市へと移動する人々が増える(宮本謙介『概説インドネシア経済史』有斐閣)。

80年代後半以降は規制緩和による外資の増大と民間企業の伸張に伴い、経済発展と労働市場の拡大がさらに進む。都市は多極分散的に拡大し、グローバル化する(今野裕昭「都市中間層の動向」『グローバル化とアジア社会』東信堂)。いわゆる「新中間層」が首都圏を中心に厚みを増し(前掲今野)、「消費指向」と「欧米

嗜好」のライフスタイルが広がる。マスメディアが多様化するとともに、子ども向けの情報も加速的に増加する。グローバル化の一方で、広くイスラム教信仰への回帰現象が起こる(倉沢愛子「開発体制下のインドネシアにおける新中間層の台頭と国民統合」『東南アジア研究』34(1))。すなわち伝統文化や精神性への揺れ戻し現象である。

社会変化は家族形態や家族のあり方にも影響を及ぼし、世帯の少人数化・少子化・働く女性の増加・離婚増という現象が顕著になる(Wirutomo, Paulus "Sosialisasi dalam Keluarga Indonesia", *Prisma* 23 (6), 1994)。家族計画政策の推進により、出生率は急激に変化していく(1970年5.6人、1985年4.1人、1994年2.8人、1999年1.8人)。共働きや離婚の増加は家庭の社会化機能を低下させ、託児所・保育園・幼稚園など専門機関の影響が増す。マスメディアから発信される情報が子どもの社会化に影響を強める(前掲Wirutomo)。

インドネシアには多様な民族集団が存在し、固有の価値観のもとに子どもの社会化が行われてきたが、「社会化はエスニック・ファクターが後退し、都市化が重要なファクターとなる」(前掲Wirutomo, p.14)と指摘されるように、地域社会の社会化力は弱まる。少子化に伴い、子どもへの投資額が都市農村ともに増える(*Prisma* 26 (2))。「賢く、技能を持ち、性格・品行のよい子に育てたい」と親たちは望む(前掲Wirutomo, p.17)。「子沢山は福をもたらす」という格言はもはや死語となり、できるだけ高い教育を受けさせ、優秀な子どもに育てることが親の関心事となる(*Prisma* 26 (2))。一方で、青少年の不良行為・麻薬使用などが社会問題となり、モラル教育の必要性が叫ばれる(*Media Indonesia*, 2008年8月13日)。

家族の変化を実証する調査結果がある。西ジャワ州の都鄙接触地域で実態調査を行った高殿は「世代が若くなるにつれて共同行動の頻度が高まっており、親子の接触がより頻繁に行われるようになってきている」と親子関係の変化を報告している(高殿良博「世代間家族関係の変容-インドネシアのスダ地域事例」『亜細亜大学アジア研究所紀要』18号、1991年、243ページ)。また世代が若いほど「家族の話し合い」と

「個人の尊重」を重視する個人志向が強いという（前掲高殿）。子どもの「しつけ」に関しては「礼儀、信仰などの基本的生活習慣」「忍耐、根気、勤勉、責任感などの個人的資質」「行動原理としてはく助け合い」が世代に関係なく重視されている。加えて若い世代の親は「公共心」「実行力」をも重視し、しつけにも時代変化が見られる。「スダ社会は農村を中心に進められている開発による影響として、経済的、社会的に大規模な変貌を経験している」なか、「家族という器は外部からの衝撃を和らげながら、ゆっくり変化していく」（前掲高殿、249ページ）という実態が観察されている（1990年代初めの観察）。

以上のように子どもを取り巻く諸空間の実情を観察してみると、根幹は時代変化に左右されないが、政治・経済・社会変化の影響によって枝葉としての新要素を加え、子どもの社会化への認識と期待は徐々に変化していることがわかる。では、おとなは民話を通してどのような価値観を子どもに向けて発信しているのだろうか。次の作業へと稿を進めたい。

2. 子ども向け民話集の分析から

分析を行う資料は「文化教育シリーズ (*Seri Pendidikan Budaya*)」という総合タイトルが付けられた子ども向け民話全集のうち47冊（計409話、1992-2004年刊行分）である。全集は1992年から2005年まで順次刊行され、なかには初版以来11刷に及ぶものもある。地域単位に分冊され、ほぼ全国を網羅する。出版元のGrasindo社はインドネシア最大の総合メディア企業「コンバス・グラメディアグループ」の傘下にあり、1990年に学校教科書・参考書の出版を目的に設立された。親会社は主要都市に書店と販売網を持つ。加えて本民話集は学校図書館資料や副教材としてまとめて購入されるので（2005年8月31日付出版担当者からの電子メール）、全国へ普及している。国の教育政策に準拠しつつ、教師や親のニーズを勘案しながら編纂された民話集である。

分冊ごとの编者（＝解説者）は、その地域を熟知した民話・言語・文化の専門家、子どもの親や教師が信頼を寄せるに足る人選がされて

いる。読者は全国の子どものため、地方語（民族集団や地域の言語）ではなく、平易なインドネシア語で再話されている。そのため民話が本来持つ独特な地域色や民族色は減退している。各冊は「巻頭辞」、民話本文（7～10話）、本文末の「解説」から成る。本稿では特に巻頭辞と解説に注目して分析する。巻頭辞からは编者の民話への基本認識や編集意図を、解説からは価値認識を知ることができるからである。

2.1 民話の役割とは

まず编者の民話に対する基本認識を示す代表的な記述を、巻頭辞から抜粋する。

「インドネシア各地には世代から世代へと語り継がれた昔話が豊かです。各話に含まれている知恵を吸収してください」（『東ヌサ・トゥンガラ民話』巻頭辞）。

「民話を読むことによって、いくつかの収穫があります。第一に面白い話を味わえます。第二に各地の起源・慣習を知ることができます。第三に生きるうえでの教訓が得られます」（『東ジャワ民話』巻頭辞）。

「話のなかに隠されている教えを解釈し、祖先伝来の文化価値を知ってほしいと思います」（『カリマンタンの民話』巻頭辞）。

上記の「知恵」「教訓」「話のなかに隠されている教え」「文化価値 (cultural values)」などの用語が示すように、编者が重要視しているのは民話の教育的な役割である。

次に、民話を読むことによって得られる成果については、以下のように述べられている。

「民話を通して各民族集団の文化を知れば知るほど、インドネシア民族の統一はより強くなる」（『アチェの民話』巻頭辞）

「インドネシアの民族文化の豊かさを知る」（『ランブンの民話』巻頭辞）

「民族の誇りを高める」（『西ヌサトゥンガラ民話』巻頭辞）

「個性とアイデンティティを形成できる」（『東カリマンタンの民話』巻頭辞）

「国土と民族への愛を育む」（『ブンクルの民話』巻頭辞）

「パンチャシラ精神を発見できる」(『バリの民話』『カリマンタンの民話』巻頭辞)

民話はインドネシア文化の豊かさを知り、民族の誇りや愛国心を育み、人格形成に役立つという認識である。また「統一」「パンチャシラ」など政治理念に結びつける記述もある。概ね政府の民話に関する諸言説(詳しくは前掲百瀬2006、百瀬2008)に沿う内容である。

2.2 民話から学ぶべき価値要素

各話には編者による10行程度の解説が付いている。テーマ・登場人物・文化背景・文化価値などの説明であるが、登場人物の性格や行動を道徳的観点から捉えた是非の記述が最も多い。解釈を子どもに委ねず、編者たちは「話のなかに隠されている教え」を自ら解説し、価値基準を示している。登場人物の性格や行動を捉えて、こうあるべきだという規範的、教条的な認識を述べているのである。解説には善悪やプラス・マイナスという二項対比的な価値づけを示すという特徴が見られる。二項対比的な説明方法は子どもの印象を強めるうえで効果的だからである。以下に解説の例を三つ示す。

例1 「正直者は必ず幸運を得るといふ昔話です。嘘つきは罰を受けます。ジュンプ(人名)は正直な行いをしたので、ほうびをもらいました。不正を行い、ひとを欺いたタルナ(人名)は罰を与えられ、銅像に変えられてしまいました」(「ジョコ・ドロンの話」『スラバヤの民話』の解説)

例2 「この伝説から得られる教訓は、あることを達成するには、支えあいながら生きることがいかに大切かということです。ましてや自分勝手に生きるとは慎まなければなりません」(「不思議なブスマンの木とラクササマカク」『ブンクルの民話』の解説)

例3 「この話は、指導者は手本と勇気を示すことができなければならないという教訓を与えます。また指導者は部下に信頼されなければならないということも教えてくれます」(「ダトゥ・ダラ・プティ」『ジャンビの民話』の解説)

解説で言及されている価値要素を分類すると、「ひとのあり方・生き方」に関する要素が圧倒的に多い。これは①個人のあり方(例1)②自己を取り巻く対外関係(例2)③指導者のあり方(例3)、に下位分類できる。さらに②の対外関係は「神との関係」「自然との関係」「家族との関係」「社会的対人関係」に分けられる。これらは社会化過程の子どもを取り巻く諸空間でもある。以下では、子どもの社会化に強く関わる①②に絞って、編者たちが民話を通して子どもたちに伝達しようとしている価値要素とは何かを具体的に探りたい。

<個人のあり方に関する要素>

上掲の「例1」では、登場人物の行為について、プラス要素の「正直」とマイナス要素の「嘘つき」「不正」が対比的に示され、価値判断が行われている。実はこの民話の本文テキストには伝説的な出来事が述べられているだけで、登場人物についての評価的な記述はない。「正直」「嘘つき」などの語彙も出てこない。解説者によってテキストの読み方の手本が示され、価値づけがなされているというわけである。

なお409話の解説で言及されている「個人のあり方」に関する価値要素を分類すると、次のようになる。プラス要素は順に、①賢い32件②努力30件③毅然16件、知識技術の習得16件④勇敢15件、忍耐15件⑤希望を持つ13件⑥決意/決心12件⑦犠牲的精神11件、正直11件⑧誠実10件、真面目10件、である。マイナス要素は、①横柄/傲慢34件②欲張り21件③悪事/不正19件④嫉妬心18件⑤嘘10件、である。

あえて総合すれば、賢明で人格的に優れ、精神的に強固で感情的に抑制のきいた人間像が見えてくる。なお解説にはジェンダー差への言及はまったく見られない。

<個人を取り巻く対外関係に関する要素>

対外関係の記述は、「社会的対人関係」115件、「家族との関係」43件、「神との関係」33件、「自然との関係」8件、の順であり、社会的対人関係への言及が圧倒的に多い。社会化の初期段階にいる読者に向けて、編者たちが最も伝達したい領域が何であるかは明らかである。

「社会的対人関係」において推奨されているプ

ラス要素は①助け合い/協力22件②友好/仲良く14件③国/社会/民族を守るための闘争10件④法/慣習/約束遵守8件⑤任務/人への忠実7件⑥一致団結5件、その他である。マイナス要素は、①ひとを見下す5件、他人軽視5件、強制/干渉5件②約束を破る4件③ひとを騙す2件、である。重視されているのは、助け合い・協力・友好など和や協調の精神である。この精神は建国五原則「パンチャシラ」においても重要な要素とされている。またプラス要素のうち、③の「闘争」、⑥の「一致団結」はかつての民族独立闘争における中核的な精神である。

「家族との関係」でのプラス要素は、順に①親への愛/敬い/奉仕14件②親への従順7件③兄弟愛4件④家族の絆4件、である。マイナス要素は親不孝が圧倒的に多く10件で、兄弟間の嫉み2件、その他である。親子関係が重視され、なによりも親孝行が推奨されている。

「神との関係」や信仰に関する記述のうち「神への祈り・信仰・感謝の重要性」が20件、「神の審判」が4件、「神の許しを乞う」が3件、「神の慈悲」が2件、その他である。神とは、具体的にはイスラム教のアラー、キリスト教の唯一神やヒンドゥー教の神々であり、イスラム教徒が大多数を占めるとはいえ、宗教の多元性が憲法で保証されているインドネシアにおいて、読者は各自が信仰する宗教の神のイメージに基づいて解説を理解するわけである。国民はだれでも宗教を持たねばならず、「1」で述べたように学校教育において「宗教教育」は必修科目となっている。編者が神に関する記述を重要視する所以でもある。

「自然との関係」に関しては、自然や環境を護る必要性が5件、動物愛護が3件である。インドネシア民話には豊かな自然と様々な動植物が描かれているにもかかわらず、環境保護への認識が高まるなかで、自然環境に関する解説があまりにも少ないことに違和感を覚える。

409話の解説に目を通してわかるのは、編者たちの価値判断に根本的な個人差がないということである。おとなの常識的、道徳的な判断である。だが子どもには未体験のことが多いだけに、結果として価値観の刷りこみになる。409話の解説において推奨されている価値要素を満遍

なく備えた人物をあえて単純化すると次のようになるであろう。家においては親孝行で、社会においては法を守り、ひとを助け、社会と一体化する。個人としては、敬虔で賢く、忍耐強く努力を重ねて学び、強い心と希望を持つ。このような人物である。民話の本文には度々登場する悪戯者、ユーモア溢れる人物、自然と共生しながらたくましく生きる人々の姿は解説ではあまり言及されていない。民話を通して編者が子どもに是非伝えたいと考える価値要素は、伝統的、道徳的、教訓的な要素に傾斜していることがわかる。

まとめとして

民話の解説を通しておとなたちが示した価値認識には、先駆的な解釈や目新しさは見あたらない。世界中の昔話には正直・勇気・賢明さ・忠告への従順など「共同体の成員たるべき心得や徳を語る話が圧倒的に多い」（西郷信綱『神話と国家』平凡社1977年、191ページ）という指摘があるが、すでに見たように、現代インドネシアの民話編集者の立場もこの枠を外れていない。だが子ども向け出版物も「その社会に流布している意味体系」を担っている（箕浦康子『文化のなかの子ども』東京大学出版会1990年、192ページ）とすれば、巻頭辞や解説に示された価値認識はどのような社会状況を映しているのだろうか。

まず、巻頭辞で編者たちが示した民話についての認識は、前にも触れたが政府の公的認識と重なる。すなわち「民話の多様性はインドネシアの多様性の象徴であり、共通性は民族の統一の象徴である。また民話のなかの文化価値はインドネシア民族の人格形成に重要である」という政治的な含意のある解釈である。これは「2」で述べたように、国の教育政策に準拠しつつ、教師や親のニーズを勘案して編纂せざるをえないという出版戦略が背景にあるためである。

次に、「解説」に示された教訓的、道徳的な態度はどう理解すればいいのだろうか。インドネシアの急速な近代化（都市化）やグローバル化によって社会全体に「物質主義と個人主義という新価値観が広まった」（前掲Wirutomo,p.14）という社会状況に照らしてみることにより、

その答が得られる。「2」で見たように、精神性や対人関係を重視する編者の道徳的な「語り」は、近代化がもたらした負の側面に対する危機意識の表出として受けとめられるのではないだろうか。

時代背景を再確認してみよう。90年代後半から最近までの社会論調には「外国漫画や読み物はオリジナルのインドネシア民話や創作の出版をはるかに凌駕」(Rosidi, Ajip, *Sastra dan Budaya*, Pustaka Jaya, 1995, p.42)、「日本の子ども番組には暴力や恋愛、セックスが多すぎるという声(インドネシアの)母親たちの間に根強い」(倉沢愛子「『ドラえもん』VS中産階級」『ユリイカ』1996年8月、111ページ)、「グローバル化の流れのなかで、モラル教育に心すべし。知識を与えるだけでなく、道徳教育を」(*Media Indonesia*, 2008年8月13日)など、グローバル化への危機感や対抗措置の必要性が語られ、グローバリズムへの警戒感が目立つ。グローバル化は子どもの社会化にも負の影響を与えるという認識である。事実、近代化による共同体の弱体化、都市化による人間関係の希薄化、家族の変化など、子どもの社会化を取り巻く環境は激しく変化している。巻頭辞や解説にはグローバル化への対抗を示す具体的な記述はない。

しかし、「民族文化」「民族の統一」「文化遺産価値」「祖先の文化価値」「民族の誇り」などの用語、さらには「かつての祖先のよきことを今日の高度な情報技術の時代に応用する」(『ランブンの民話』巻頭辞)、「外国の読み物が溢れているからこそ、民話の記述はより一層重要なのです」(『チレボンの民話』巻頭辞)などの記述から編者の態度が読みとれる。現代インドネシアを取り巻く社会状況への危機感が編者の意識下にあることは間違いなさそうである。

だがグローバル化とそれに伴う情報化の潮流を無視することも、子どもの社会化への影響を阻止することも難しい。先が不透明で人間関係が希薄化傾向にある時代を生きるには、社会に適應できる力のみならず、社会を主体的、自律的に生きぬく力が不可欠である。このような状況下、インドネシアでは子どもの社会化に関する新たな取り組みが始動した。2004年度から初中等教育では「コンピテンシー (competency) を基盤とするカリキュラム」が施行されている。

単なる学力ではなく「社会で求められる価値観・態度・知識・スキルを総合したコンピテンシー」(中矢礼美「世界の生徒指導事情9 インドネシア」『月刊生徒指導』2004年12月、55ページ)である。

この背景には、「国際的に競争力を持つ質の高い教育」「社会の需要とグローバルな挑戦に直結した教育」(2005年政令19号「国民教育スタンダード」付則説明)を目指す国家戦略がある。「公民教育」の新シラバスには、新たな国民像が具体的に示されている。「批判的、論理的、独創的に考える」「積極的に責任を持って社会・国民・国際活動に参加する」「肯定的、民主的に自己形成を行う」「情報伝達技術を有効活用して諸外国の人々と交流する」ことのできる国民である。新カリキュラムが浸透するのはまだ先となるが、社会化観は確実に変化しているようである。

では、社会や社会化観が変化するなか、子ども向け民話の役割や利用はどのような方向へ向かうのだろうか。第一に、民話はインドネシア共和国の国民文化と文化価値を象徴するという従来の共通認識は今後も変化しないと思われる。小学校用「インドネシア語」の新シラバス(2006年政府発表)では、教材として積極的に民話や文学作品が利用されている。民話や文学を読むことによって自文化(ナショナル・レベルでの)を理解し、国語力と情操を養うというねらいである。国民文化の象徴としての民話は今後も教育(特に初等教育)に利用され、民話を通して児童の社会化や人格形成に一定の影響を与えるであろう。

第二に、グローバルに対するローカルの独自性を主張する手段として民話が利用されるであろう。グローバル文化に対するインドネシア文化の、中央に対する地方(あるいは民族集団)文化の独自性の主張である。たとえば西カリマンタンでは先住民であるダヤックの言語と文化を護るために、小中学校のローカル・カリキュラムにおいてダヤック語による民話の授業が実施されている。口頭伝承の記録、ダヤック語による民話のラジオ放送も試みられている(*Journal ATL*, 2002)。子どもたちが自文化(ローカル・レベルでの)への認識と自信を深めるための教育上の試みであると同時に、ローカルの存在主張でもある。また中部ジャワのある文化祭で中学生が民話を

素材にした「雨乞いのパフォーマンス」を行った。「グローバル化による教育の画一化と情報化のなかで地方や伝統文化の出番がない」という状況へ対抗するための実践であるという(*Kompas*, 2006年12月15日)。

第三に、民話の利用は多様化していくと思われる。伝達媒体と目的の多様化である。伝達媒体は語り・印刷物・音声テープ・人形劇・映画・テレビ放送に加えて、最近では民話アニメのDVDが新たな媒体として利用されている。読書習慣を身につける導入としての読み聞かせ(*Kompas*, 2006年9月8日)、親子の絆を深めるための幼児への読み聞かせと語り(*Pontianak Post*, 2007年12月2日)など、民話の利用目的も多様化している。昔話の語りを通して子どもた

ちに知識と価値観を伝えようとする若者もいる(*Kompas*, 2006年2月24日)。形式や目的を変化させながらも、民話は若い世代へと引き継がれようとしている。

民話には苦境にあってもめげずに生きていく人々が大勢登場する。主人公の行動や人生を通して、わかりやすく価値観を伝えられるという便利な機能を持つ。昔から子どもへの伝達媒体として民話が利用されてきた所以でもある。子どもたちが自律的に生きる力を学ぼうと、これからも民話が担える独自の役割がありそうである。新時代に適合した子どもの社会化のために、民話集の編纂には新たな視点が求められるのではないだろうか。

(大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員)